



巻頭言

代表取締役専務

竹村 寧

「政令指定都市と建設業の役割」

市町村合併を経て浜松市もこの四月からいよいよ政令指定都市としてスタートした。

浜松市の大きな節目を市民の一人として迎えることが出来たことに大変意義深いものを感じている。

政令指定都市として我々が抱いていたのは横浜市や大阪市などのように人や物、情報、文化等が行き交い交流拠点としての様々な機能を兼ね備えた、文字通り日本のブロックを代表する大都市というイメージである。今回そのような大都市としてのお墨付きとも言える政令指定都市への仲間入りできたことは、地域のステータスが上がり、将来への夢が大きく

広がるのではないかと思うし、地方分権が叫ばれる中で県から財源や権限が委譲されるメリットを最大限に活かして主体的に地域の実情に合った政策運営を図ることによって、独自性と風格のある都市形成が進んでいくのではないかと期待している。

さて、我々建設業の関わりはどうなるのか。一昨年の合併によって人口は八十二万人、面積でも高山市に次いで全国で二番目の広さとなった政令指定都市浜松ではあるが、実のところ市域面積の六十八％は森林が占めている。そのために上流域の森林地帯と下流域の市街地や農地また生産地と消費地が一つの圏域となり

環境と共生する全く新しいタイプの都市形態となった。浜松市では都市政策ビジョンで地域の均衡ある発展を目指し、それぞれの地域の特性を活かした「環境と共生するクラスター型政令都市」を描いている。その為特に森林地域においては自然災害の防止、二酸化炭素の吸収、水源の涵養など都市の一体的な機能、役割として持続可能な運営、管理していくことが大切だと思う。したがって森林は山側だけの仕事ではなく、街側の視点でのアプローチがどうしても必要で、地域のことをよく理解している我々建設業が得意とするところである。地元産の活用をはじめとして環境、エネルギー、観光振

興など幅広い分野で社会ニーズに応えるべき問題解決型あるいは提案型を進めていけば、政令指定都市において建設業が果たすべき新たな役割があるのではないかと思う。



なかけんニュース What's new



ストップ 温暖化！ 「このまま行けば地球温暖化への地獄の二丁目突入」

新技術推進室 佐藤 晃俊

今年は暖冬で全国各地のスキー場は大打撃を受けたようです。そんな折2月に気象庁が新たな気象用語を発表しました。「最高気温が35℃を超える日を『猛暑日』と呼ぶ」

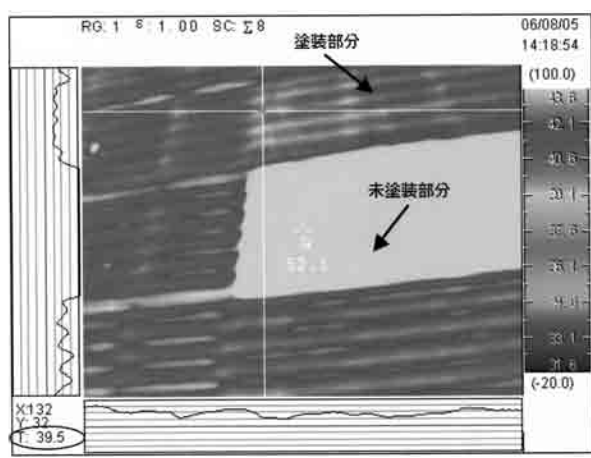
今までは、最高気温が30℃以上の日を「真夏日」と呼んできましたが、全国各地で35℃を超える日がここ数年急増した為に、予報解説に新たな用語が必要になったようです。

東京地域での2000年時点の30℃を超えた期間が延べ45日であったというデータがありますが、愛知県名古屋地域はなんと60日まで達しています。真冬の2月に気象庁がわざわざ猛暑日なるものを発表したのはなぜでしょう。

先日東大教授の山本良一先生の講演を拝聴する機会があり、その中でショッキングなお話がありました。「今の地球は温暖化への地獄の一丁目さしかかっており、あと20年もたたないうちに、生活環境が激変し人類の破滅へと向かうであろう。そのためには今日からでも全人類がCO2削減に取り組まなくてはならない」2100年の全世界の平均気温が2000年にくらべて4℃上昇するという学術発表があったばかりですが、その発表を根底からくつがえす内容でした。今年の夏は過去最高の「猛暑日」が記録されるだろうとある学識経験者が言っていました。気象庁の発表、山本先生の講演内容を考えると事前の対策が必要不可欠であると思われれます。そこで提案です。真夏のエアコンの使用

量を減らしてCO2の排出量を削減できる二つの機能性塗料をお勧めいたします。「熱線遮蔽機能塗料」「熱交換機能塗料」が今年の真夏対策、省エネ対策、そしてCO2排出量の削減を実現させます。住宅、ビルの屋根、外壁に施工することで内部の気温上昇を止め、効率よいエアコンの使用が可能になります。弊社の講堂棟の屋根にこの塗料を昨年施工して、外気温37℃の条件のなか施工箇所の表面温

度が39℃、未施工部分が57℃と、温度差が約18℃という実証結果が出ました。快適な夏を過ごし省エネにも貢献、CO2排出量削減と環境にも大いなる貢献が期待される両機能性塗料を皆様へ是非お勧めいたします。詳しい説明は新技術推進室 佐藤までお問い合わせください。



施工場所 講堂屋根
平成18年8月5日 14時20分頃測定
施工場所と未施工場所を熱画像処理にて確認
TH7800N ハンディサーモグラフィ(NEC三栄)
塗装部分の最高温度 39.0℃
未塗装部分の最高温度 57.6℃